

今回は中日新聞のコラム「見守る愛の大切さ 週の始めに考える」を紹介します。

先日、ある修了式に招かれ感銘を受けました。見まもる愛の大切さをあらためて教えられたからでした。ことに若者が一人前に育っていくためには。

その修了式は、横浜市の注文家具メーカーの「秋山木工」の職人お披露目式でした。2006 年 3 月長崎、大阪、静岡、福島出身の男女四人が四年七カ月の修業期間を終え、職人としての独り立ちが認められた日です。全国からの招待客を前に、晴れ舞台の新職人には笑顔と涙が、最前列のテーブル席の両親や恩師たちの目には涙がにじみました。

### 毎日が辞めたい日々

秋山木工は昔の丁稚(でっち)制度を取り入れた厳しい修業で全国に知られるようになりました。原則四年の丁稚修業で職人に、職人として四年働いたあと独立していくシステムです。覚悟はしていても、修業の厳しさは半端ではないようです。「毎日が辞めたい日々だった」と言うのです。男も女も丸坊主になる修業期間の四年は、寮での共同生活。朝は五時前起き、平均睡眠時間が三、四時間。休みは盆と正月の十日間。恋愛は禁止、携帯電話も持たず、家族への連絡は手紙に限られます。一年生丁稚は基礎技術の反復訓練と現場での先輩職人の手伝いといった下働きがほとんどです。生活の厳しさや肉体の疲労には慣れたとしても「こんなことで一人前の職人になれるのか」の疑問や不安、心の迷いは簡単に吹っ切れるものではありません。

### 一流職人育てる条件

秋山社長は「馬鹿(ばか)になれ」と叱ります。素直に謙虚になって学べとの教えなのですが、その実行がいかに難しいか。「不器用な人間ほど一流になれる」も社長の持論です。不器用ゆえにひたむきに努力できる。そんな人間がやがては大成するとの経験知でもあるのですが、それが分かるまでには時間がかかります。修業中のだれもが襲われる挫(くじ)けそうになる心。耐え抜けるのは故郷の両親や祖父母の存在、それに恩師たちの励ましです。期待を裏切れないからです。職人を育てて何年かたって、秋山社長は、丁稚本人のひたむきさ一親や恩師の愛一会社の真摯(しんし)さの三位一体の関係があって、はじめて一流の職人が育つことに気づかされました。自分だけで育てようとしたのは思い上がりで、職人はみんな育てるのです。そして、一流の職人とは技術より人間性です。ひとつひとつに心を込め、ものを大切に、感謝の心をもつ職人が大事です。

来春の大卒予定者の十人のうち四人は就職が決まらないままの越年。ただ、来春の新卒四十五万人に対して求人は五十八万人です。求人倍率一・二八、中小企業ではなお人材が満たされないといわれ、就職戦線に大きなミスマッチ構造がありそうです。

### 幸せ方程式それぞれ

学生の希望は大企業や有名企業に殺到しています。しかし、大企業や有名企業への就社が安定と高賃金をもたらしたのは過去の話。そんな幸せの方程式は消えました。外国人労働者との競争も加わって、より専門的な能力、知識、技術が求められています。家具職人をめざす若者がひたむきな努力に活路を見いだすように、自らを鍛え、それぞれの努力で幸せの方程式を導くしかないようです。

厳しい時代ですが、挫折なき人生も、悩みなき人生もありません。タフでなければ生きられませんが、優しさという生きる資格は身につけたいものです

Q1: 一年生丁稚の肉体の疲労以上の問題は何ですか？

( )

Q2: 秋山社長の考える一流職人になる 3 つの条件は何ですか？

( ) ( ) ( )

Q3: 昔の幸せの方程式は何ですか？

( )

Q4: あなたが考える幸せの方程式は何ですか？

( )